

食を守るの最前線

本市には、さまざまな課題に向き合いながらも懸命に農業に取り組む農家さんがいます。彼らには農業を元気にするヒントが隠されているかもしれません。



手間ひまかけた野菜を守りたい、だから狩猟という手段を選ぶ

「農作物の栽培に自分の生活がかかっていることや、子どもたちの安全面を確保するためにやむなく駆除を行っています。今でも生き物を駆除するのは心苦しく、できるなら共存が望ましいと思っています」と引き金を引くときの心の葛藤を語ってくれました。

また、市村さんが所属する猟友会塩原支部は20人ほどメンバーがいて、平均年齢は70歳前後で全員が男性。その中で市村さんは最年少にして唯一の女性です。しかし、市村さんが狩猟を始めたことが周りの同年代にも波及し始めているそう。「現在狩猟免許取得にむけて動いている人が複数いて、近いうちに若い男性や女性ハンターも誕生する予定です」とメンバーが増えるのを心待ちにしているようでした。

鳥獣被害から大切な作物を守るために

丹精込めて育てた農作物が野生動物に食べられて、今までの苦労が水の泡…。何ともやりきれないことです。このような鳥獣被害をなくすために、市ではさまざまな取り組みをしています。

- ◆防除柵設置費用の助成
農作物を野生動物から守るための電気柵などを設置する費用を一部補助。
- ◆狩猟免許取得費用の助成
鳥獣被害を減らすためには、必要に応じて駆除することも。新たにハンターになるための費用を一部補助。

- ◆鳥獣管理士を地域に派遣
鳥獣被害対策の専門家を無料で皆さんの住む地域に派遣。被害軽減に向けての効果的なアドバイスがもらえます。
- ▶問い合わせ
☎農林整備課 ☎0287(62)7148

Case2 鳥獣との共存を模索 農産物を守る女性ハンター

市村 さやか さん
市村農園で塩原高原大根の栽培を行う傍ら、首都圏に向けた販路拡大にも力をいれている。

深刻さを増す鳥獣被害
「電気柵やわなの設置を行っていましたが、シカの繁殖スピードがあまりに早く、それだけでは対策が間に合わないので、3年前に狩猟免許の取得を決意しました。そう語る市村さんは、16年前の結婚を機に農業に携わるようになり、高冷地の特性を生かし、塩原高原大根を栽培。嫁いだ当初、有害鳥獣による農作物の被害は収穫量全体の1割程度。しかし、シ

カの頭数が増えるにつれて年々被害も深刻になり、近年は4割ほどが被害を受けることもあるそうです。有害鳥獣への対策は、専業農家の市村さんにとって生計に直結する喫緊の課題でした。

狩猟を始めたことでの変化
狩猟を始めたことで、有害鳥獣への対抗手段が1つ増やせたため、少しずつ被害は減ってきていると言います。「他地域の猟友会にも人脈ができました。狩猟だけ



収穫された大根はすべて手作業で丁寧に洗われる。

Case1 大規模稲作で 地域を支える農業士

佐藤 友幸 さん
妻と長男夫婦の4人で稲作と畜産を営む専業農家。昨年度、県農業士に認定された。



農地を守り、地域の農業を支えたい

農地借り受け地域支える
「農地を貸し出す側の農家さんにとって、先祖代々守ってきた土地を他の人に貸すというのは少なからず抵抗があるでしょう」。そう思うからこそ、佐藤



自らが所有するコンバインで、すべての農地を1か月かけて刈り上げる。

農地貸借制度を活用して
20年ほど前から後継者のいない農家の農地を借り受け、規模を大きくしながら米を栽培している佐藤さん。年々借りる農地の数は増えていて、全てを合わせる自分所有する土地のなんと4倍にもなるそう。

「農業公社が複数の農家さんから借り受ける場合でも、契約などの手続きをまとめてしてくれるので助かります」。現在、10軒以上の農家から借り受けているそうです。

稲作をするには、規模が大きくても小さくても必要な農機具は同じであるため、大規模にすることで収益にも結び付いて稲作が続けられると言います。

さんは他の農家の土地を借りる際には丁寧な交渉を心掛けています。

「後継ぎがいなくて困っている農家さんの力になれるのは、やはり嬉しい」と話し、貸し手の農家から感謝をされることも多く、やりがいを感じるそう。

6年前からは息子の優樹さんも農業に従事し、「今まで守ってきた農地を息子にも引き継いでいきたい。これからも身体が続く限り、稲作を続けたい」。そう語る佐藤さんの表情からは、このまわりの農業を支えたいという強い気持ちが伝わってきました。

農業公社を介した農地貸借の流れ

